

## 年譜

1887年 2月3日、ゲオルク・トラークルは鉄商人トビアス・トラークルと彼の妻マリアの6人の子供たちの第4子としてザルツブルクに生まれる。

1892年 8月8日、トラークルのお気に入りの妹グレーテが生まれる。9月から皇室及び王室師範学校のカトリック《練習学校》と福音派の教義に通う。

1896年 エアハルト・ブッシュベックと終生の友情の始まり。

1897年 9月にザルツブルクの大学広場にある人文系ギムナジウム入学。

1900年 ラテン語と数学の成績不良のため第4学年を繰り返す。作曲家アウグスト・ブルネッティ・ピサノによるピアノ教授。ロマン音楽への熱狂の目覚め。ショパン、リスト、ロシア人たち――後ヴァーグナー。

1904年 文学的活動の始まり。レーナウ、ボードレル、ヴェルレーヌ、ゲオルゲ、ホフマンスタールの影響下に詩（その中に『聖者』）や抒情的雑文が成立する。詩人会《アポロ》（後《ミネルヴァ》）で気の合う者たちとの結びつき。ニーチェとドストイェフスキー・崇拜が始まる。最初のクロロホルム・失神。

1905年 ラテン語、ギリシャ語、数学の成績不良のため第7学年でギムナジウムの勉学を中断。9月18日、カール・ヒンターフーバーの薬局《白天使》に見習いとしてはいる。9月26日、ギムナジウムから退校処分。劇作家グスタフ・シュトライチャーとの友情。その影響下で劇詩人としての試み（模範はイプセン、ストリンドベルク、メーテルリンク）。

1906年 3月31日、ザルツブルクの街・劇場で一幕物『死の日』の上演――お義理の喝采。《ザルツブルク国民新聞》の折に触れての寄稿への招待。5月12日、抒情的小品『夢の国』でジャーナリズム初登場。9月15日、街・劇場で一幕物『蜃気楼』の初演。作品の不評。

1907年 不成功の落胆が創造的仕事を麻痺させる。漸次強い麻薬剤（モルヒネやヴェロナール）に馴染むようになる。多分年末頃には、3幕物の悲劇『ドン・ジュアンの死』（それは後、言われるところでは1912年破棄される）のための粗案の書き下ろしが始まる。

1908年 2月26日、見習い試験を前もって済まし成功する。その他の抒情詩が成立する。9月終わりヴィーンへ移住し大学で4学期の薬学の勉学を開始。トラークルはK・L・アンマーのランボー・翻訳を知る。これは彼に長い間強い影響を及ぼすこととなる。

1909年 大抵はヴィーンに、場合によってはザルツブルクに。3月20日、7月13日並びに16日の予備試験に満足すべき成果で合格。文学的躍進を新たにする――〈私は恵まれた日々を過ごしました〉（6月11日のブッシュベックへの手紙）。9月からグレーテ・トラークルはヴィーン音楽院の生徒になり、ポール・ドゥ・コンヌにつく。青春詩の篩い分け、これは年末ブッシュベックに――彼は秋からヴィーン大学の法学生――出版者を捜す目的で手渡される。10月17日、首都の日刊紙でジャーナリズム初登場――ヘルマン・バルの推薦で《新ヴィーンジャーナル》が3つの青春詩『ある通り過ぎる女に』『完成』並びに『祈祷』を掲載する。その少し後オーバー・ザンクト・ファイトにバルを訪問。12月18日、ブッシュベックはミュンヘンのアルベルト・ランゲン出版所に青春詩を差し出す。

1910年 2月初め人形劇『グローバル』の書き下ろし。6月18日、父の死。成熟した形式への決定的爆発と価値ある作品たる最も早期の詩の成立。その中に『滅び』『美しい街』『嵐の夕べ』。6月28日、7月9日並びに21日に口述試験。トラークルは薬学マギスターの学位を授与される。詩人は彼の〈汗水垂らして闘い取られた手法〉を意識するようになる。彼はこの手法で〈律動と形象の地獄のような混沌〉を克服しようと努める。グレーテ・トラークルはベルリンへ移住する。10月1日、一年・志願兵として帝室及び王室ヴィーン衛生第2大隊で現役勤務につく。

1911年 9月30日までヴィーンで衛生勤務。志願兵期間終了後《一年志願兵、階級薬学伍長、ゲオルク・トラークル》は管轄州狙撃兵補充地域インスブルックとの予備役関係に置かれる。重い抑鬱の発作と周期的反復の始まり。10月15日から12月20日までザルツブルクの天使・薬局で調剤師。《ザルツブルクの文芸並びに芸術の会パン》の会員たちとの交際。文か批評家で《ファッケル》・協力者カール・ハウアーとの親交。酩酊の乱行。12月1日、国境守備隊薬剤士官補（少尉の階級）に任命される。物質的窮境。

1912年 3月、《叫び、若き人々へのパンフレット》（ヴィーン）が『明るい春』を載せる。ヴィーンの《文芸と音楽のための大学連合》の会員になる。4月1日からインスブルック大0衛戍病院の薬局で国境守備隊薬剤士官補として半年間の見習い勤務を果たす。軍隊に復役するためである。ロベルト・ミュラーがトラークルをインスブルックの半月刊誌《デア・ブレンナー》の発行者ルートヴィヒ・フォン・フィッカーに推奨する。5月1日、『南風の吹く場末』が《ブレンナー》に載る。その後まもなくフィッカーや《ブレンナー》の協力者たち、カール・ダラゴ、カール・ボローメウス・ハインリヒ、カール・レックと個人的面識。死に至るまでの最後の2年間、彼らとの親密な友誼。7月17日、グレーテ・トラークルはベルリンで書籍商アルトゥル・ランゲンと結婚。秋には、最初の成熟詩作品集（表題『黄昏と滅び』を公開予約の道で出版しようとする友人たちの骨折り。《ファッケル》と《ブレンナー》には予約の勧め。大きな文学的開花の主要期。『悪の夢』『深き淵より』『人類』『オパールに写る3つの光景』等々が成立する。勤務での広場恐怖と非人間化状況。10月1日、『賛美歌』が《ブレンナー》に載る。半年の見習い終了後、上官たちの意見によって陸軍勤務に採用される。10月30日、トラークルは予備役への移動を申請する。11月30日、請願は受理される。再び大きな心的苦難期。ブッシュベックはアルベルト・ランゲン出版所に詩集『黄昏と滅び』を差し出す。トラークルは12月1日、ヴィーンの労働省であるポストに就くことになる。しかし4週間の猶予を得る。ザルツブルクとヴィーンで『ヘーリアン』の仕事が続く。ヴィーンでカール・クラウス、アドルフ・ロース、オスカル・ココシュカと接触。12月31日労働省で面接。

1913年 1月1日、トラークルは辞職願いを書く（勤務は前の日、2時間だけだった）。インスブルックへ帰り『ヘーリアン』完成。それは2月1日《ブレンナー》に載る。2月中旬から4月初めまでザルツブルク。〈再び病気と絶望の鎖〉。3月19日、アルベルト・ランゲン出版所が差し出されていた詩を拒絶する。重い心の悩みの中でインスブルック・ミュラーウのフィッカーのもとに、またイーグルスの兄弟のホーエンブルク城のもとに逃避。トラークルはブッシュベックに、ヴィーンの公立病院で仕事をする可能性を問い合わせる。4月1日、若きライプチヒの出版者クルト・ヴォルフから詩についての問い合わせ。トラークルは全原稿を送る。これに続いてエーエー詩人の頭書の抗議のもとにエーエーフランツ・ヴェルフェルによる貧弱な選集。4月15日、フィッカーは『夜の歌』を公にする。『エーリス』・詩は5月1日と7月1日に、『カール・クラウス』は7月15日に《ブレンナー》に載る。7月初め、トラークルはザルツブルクに滞在し、7月15日から8月12日までヴィーンの陸軍省で役人として働く。7月終わり、『詩』クルト・ヴォルフ出版（《最後の審判の日》叢書7/8号）の書店への引き渡し。8月の第3週、トラークルはヴェニスへ旅行。そこでカール・クラウス、アドルフとベッシー・ロース、ペーター・アルテンベルク、ルートヴィヒとチッシィ・フォン・フィッカーに合う。12日間滞在し、ヴィーンへ帰る。10月1日『夢の中のゼバスチャン』

が、15日『悪の変容』が《ブレンナー》に載る。重い心的危機。〈私の生活はこの数日間、言うに言えないほど粉々に砕け散りました。そしてただただ口も利けない痛みだけが残っています。〉インスブルック、12月10日、トラークルの唯一の公的朗読。ロベルト・ミッヒェルと一緒に。12月中旬から、トラークルとレックによる成熟詩作品の年代順的配列。後レック一人で諸場面と生活圏による詩のグループ分け。

1914年 『夢と狂気』が完成され、2月1日《ブレンナー》に載る。最初の1月号に『幼くて死せる者に』『アニフ』『西欧の歌』『太陽』それに『黙せる者らに』が印刷される。ハンス・リンバッハとの会話。3月1日『子の7つの歌』が載る。トラークルは新たに成立したアルバニア国で、軍薬剤師として職に就く試みをする。3月初め、詩本『夢の中のゼバスチャン』（クルト・ヴォルフ）の植字の仕事が始まる。3月15日と25日の間、トラークルはベルリン・ヴィルマースドルフの彼の重病の妹グレーテ（ランゲン）のもとに留まる。エルゼ・ラスカー・シューラーとの出会い。完全な混乱の中でインスブルックへ帰る。自画像が成立する。4月1日『別れを告げた者の歌』が、5月1日『黄昏の地』が《ブレンナー》に載る。4月中旬、テオドル・ドイブラーとインスブルックで出会う。妹を救うために、トラークルは以前の学校友達に援助を頼む。この男は5月25日、そっけなく断る。重々しい絶望の発作。5月《後期戯曲断片》の書き下ろし。フィッカーと数日、ガルダ湖畔のトルボーレに。5月終わり、『夢の中のゼバスチャン』ゲラ刷りの校正（最終校訂の仕事）。移住計画。トラークルは6月8日、王室・オランダ植民地管理機関にオランダ・インドで薬剤師の職はないかと問い合わせる。『啓示と没落』が成立する。6月28日、サライエヴォの暗殺。6月と10月の間に、7つの最後の詩が書かれる。フィッカーはある芸術保護者（ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン）の寄付金から、2万クローネをトラークルに分配する。7月28日、オーストリア・ハンガリーはセルビアに宣戦布告。8月6日、ロシアへの諸関係断絶。8月24日、トラークルは薬剤士官補としてインスブルックの衛生大隊とともに戦場へ出かけ、帝室及び王室野戦病院7/14に配属される。レンベルク地域で部隊の行軍続く。ついに9月11日、東ガリシアは明け渡され、オーストリアの前線はカルパチア山脈へ撤退する。グローデクから退却中、戦友たちがトラークルの自殺の試みを阻止する。10月中旬、詩人はリマノヴァで彼の精神鑑定のため、クラカウへ派遣命令を受ける。10月25日と26日、フィッカーがクラカウ衛戍病院精神科15号室にトラークルを尋ねる。10月27日、友人に最後の詩『嘆き』と『グローデク』が追送される。11月3日夕刻、トラークルはコカイン服用過多で死亡する（心臓麻痺）。11月6日、クラカウのラコヴィッツの墓地に埋葬。

1915年 春、1915年の《ブレンナー》・年報に、7つの最後の詩と『啓示と没落』が公にされる。詩本『夢の中のゼバスチャン』が1914年の著作権・覚え書きにより、ライプチヒのクルト・ヴォルフのもとで出版される。

1917年 11月21日、グレーテ・ランゲン・トラークルはみずからの手で果てる。

1919年 カール・レックの整頓による、価値ある詩の最初の全集版『詩作品集』（クルト・ヴォルフ出版、ライプチヒ）が出される。

1925年 トラークルの遺骨がチロルへ移される。10月7日、インスブルックのミューラウ区墓地に埋葬。

1939年 青春詩作品がエアハルト・ブッシュベック編集で、『黄金の聖杯から』の表題のもとにオットー・ミュラー社（ザルツブルクとライプチヒ）から出版される。

1969年 2巻の歴史的・批判的版（詩作品と手紙）がヴァルター・キリーとハンス・スツクレナール編集によって、ザルツブルクのオットー・ミュラー社から刊行された年。

## 証言

エルゼ・ラスカー・シューラー

彼の眼差しはとても遠くにあった。  
彼はかつて少年のときすでに天国にいた。

だから彼のことばは  
青い雲や白い雲の上で言われた。

私たちは宗教について議論した  
だがいつも二人の遊び仲間のように

そして互いの口から出るのはいつも神ということばだった。  
最初にそのことばがあった。

詩人の心 ひとつの堅固な城  
彼の詩はうたう命題だった。

彼はおそらくマルティン・ルターだった。

三つに重ねられた魂を彼は手に抱いていた  
聖なる戦いへ出かけていったとき。

———そうして私は彼が死んだことを知った———

何故であろう 彼の影が  
夕暮れの私の部屋の上にとどまった。

1915年

ライナー・マリア・リルケ

トラークルの形姿はリノス的な神秘的形姿のひとつです。『ヘーリアン』の5通りの現れ方を見ると、その形姿が本能的に私にはつかめるのです。その姿は多分捕らえ得ないかもしれません姿、おそらく彼自身によってもそうだったのでしょ……

とかくするうちに、私は『夢の中のゼバスチャン』を手にいれ、感動し、驚き、予感し、途方に暮れながら読みました。というのも、この沸き上がりかき消える響きの諸条件は、まさしく夢が出てくるかもしれぬ状態と同じく、取り返しのない唯一のものだったというのがすぐにわかるからです。精神的に近い者でさえ、やはりなお窓ガラス越しにみるように、これらの光景や眺めを経験するだろうと、私には想像されます。つまり締め出された者として。それというのも、トラークルの体験は鏡像の中で動いているみたいですし、足を踏み入れられぬ彼の全空間を、鏡の中の空間のように満たすからです。(彼は何者だったのでしょか?)

ルートヴィヒ・フォン・フィッカー宛の手紙から。1915年

ルートヴィヒ・フォン・フィッカー

アルコールでも麻薬でも大食漢だった彼は、気高い、精神的に並外れた鋼鉄のような姿勢を、決して捨てませんでした。かつて彼が酩酊状態でふらついたり、あるいは生意気になるのだけでも見た者は誰もいません。彼のとても穏やかな、言うに言えぬ黙せるものの周りを回転するような話し方は、葡萄酒を傾けながら、夜の時刻が進むにつれしばしば奇妙なほど頑なになり、刺々しい悪をきらめかせることはありましたが。しかし

そのことで、彼はしばしば話し相手以上に苦しんでいました。相手の頭上を超えて、彼は沈黙の輪の中へ向かうおのれの話に短剣をきらめかしていたのです。それというのも、彼はそういった瞬間には、彼の心に文字通り血を流させる真実によって輝いていたからです・・・

クルト・ピントゥスへの報告。1919年

アルベルト・エーレンシュタイン

彼は『夢の中のゼバスチャン』で、彼の単調な歌をすでに激しい大きな熱情で歌いあげる。そこではもはや個々の違いはなく、ただこの法悦たる詩集の中の散文作品だけが、詩という無比の完全性を超えるひとつの道を暗示している。この暗鬱的・予言的散文幻想は、今や破壊されてしまった発展の一可能性を力強く予感させる。しかしシッド（11世紀頃、キリスト教の擁護者として、ムーア人相手に奮闘したスペインの伝説的勇士に、ムーア人が与えた称号。首領、総領の意）というよりは、むしろスウィシッド（自殺者）だったこの静かな詩人は、戦時自由志願兵として人殺しの戦場へ出されたのだ！今や彼はすっかり黙ってしまった。ザルツブルクに生まれ、クラカウで死ぬ――その間には古いオーストリアがある。彼を知っていたのは、ヴィーンとインスブルック、それにベルリンの何人かだ。彼が何者だったかを知る者は少ない。また彼の作品について知っている者も少ない。つまりオーストリアではかつて誰一人として、ゲオルク・トラークル以上に美しい詩句を書いてはいないということ。

殺された兄弟たちに。1919年

テオロール・ドイブラー

静かな憂愁をたたえた詩人、彼と私の最後のハイキングは、インスブルックから村々を抜け、春の道をハルへと辿った。私たちはその時こそ、お互いを本当に知り合ったのだ。彼は私たちがたまたま出会う子供たちに、しばしば用心深い言葉を語りかけたが、そうでない時には、絶えず死について話した。私たちが夕暮れ時別れる段になると、まるでゲオルク・トラークルの金銀細工の贈り物がわが手に残されたみたいだった。注意深く花々を差し挟んだ柔らかな音節が感じられ、語の意味は彼と私にだけ明かなものだった。三途の川の前で、私は正確にその文章を思い出した。〈死に方はどうでもいいことです。死は墜落だからとても恐ろしい。そこで死の前に、あるいは死の後に何が生じようと、すべては取るに足りぬことです。私たちは理解しようのない暗黒の中へ落ちていくのです。死ぬことが、永遠へ至る一秒が、どうして短いなんてことがあり得ましょう？〉私は彼に尋ねた。〈だからこそ深淵をうがつ会話とか、傾斜の急な場所とか、まるで高所にいるみたいな生活の中では、目眩が私たちを捕らえるのですか？〉彼は頷いた。〈その通りです！〉わずか数カ月後には、ゲオルク・トラークルに命ぜられた墜落を、彼は恐れなかった。判決と跳躍は、死の年1914年の春と秋に起きた。突然、私は狼狽し、三途の川を離れた。だからこの文章が暗黒の水の中へ舞い落ちたのだ！散りじりにもならず？

アテネ。1921年

ヨゼフ・ライトゲープ

ゲオルク・トラークルの作品は、完全に閉じられた自分自身の中に憩う世界の像である。もしその世界に名をつけるとすれば、ただトラークル・世界と呼ぶことができよう。それほどこの世界はひとつの創造であり、ドイツ文学の領域では他の誰とも比較することはできぬ。彼一人で創造した世界なのだ。なるほど私たちの世界の素材から作られてはいる、しかしいかに彼はその素材を変形し、彼の本性を浸透させ、言葉にしたことだろう。全く新しい、繰り返しようのないものが生み出されたのだ。それはドイツ文学の中の孤島であり、実際古い抒情詩とも、同時代の抒情詩とも結びつきはない。多くの者によって指摘されているボードレーとランボオの影響は、表面下の奥深いところへは到達していないのである。

トラークル・世界。1950年

## マルティン・ハイデッガー

トラークルの詩の多義的な音調は集合ということから、つまりそれ自体のために考えられ、常に言い表されることのない調和ということから生じる。この詩的言表の多義性は、投げやりな者の不正確さではなく、あるがままにしておく者の厳しさである。〈正しい観照〉の慎重さに携わった者、そしてこの観照に従う者の厳しさである。

トラークルの詩作品に特有な、この彼自身の中では全く確かで多義的な言表を、他の詩人たちの言語と区別することは、われわれにとってしばしば困難を伴う。だが彼らの多義性は、詩的手探りの不正確という曖昧さに由来する。それというのも、彼らの多義性には本来的な詩とその場所が欠けているのである。トラークルの本質的に多義的な言語の無比の厳しさは、より高い意味においては非常に一義的であり、単なる学問的・一義的概念のあらゆる技術的精密性にも勝る点では、限りなくらいである。

ゲオルク・トラークル。彼の詩の一論究。1952年

## フリードリヒ・ゲオルク・ユンガー

キリスト者の生活とは、彼がある宗派に所属するということ、彼の教会の教義と慣例に従って生きるということに示されるとすれば、トラークルをキリスト者と呼ぶことはできない。彼はキリスト的祖先の後裔として、キリスト者なのである。西欧で成長し、キリスト教の学校をくぐり抜けたすべての者と同じキリスト者なのだ。彼は子供の時・・・洗礼を受け堅振礼を施された。これで他の多くの者たちと同じく、彼にとって教会に対する彼の関係は終わる。彼は信仰と生活の中に現在化されている、一切の市民的なものを避ける。そうすることで現在から抜け出るのである。この現在の中では、神は沈黙している。彼の金の目は〈黙しつつゴルゴダの丘の上で〉開く。彼は沈黙と無関心の中で、このゴルゴダの丘を観察しているようだ。

トラークルの詩。1964年

## 著者について

オットー・バージルは1901年ウィーン生まれ。スラヴ・ドイツ語圏オーストリアの出身。大学ではドイツ文学と古生物学を学ぶが、中退。1920年から抒情詩、翻訳、随筆のようなものを発表。早い時期の作品（その中には長編小説の草稿や物語がある）は、第二次大戦の空襲で失われた。戦時中はバーのピアニスト、出版者の原稿審査係、ジャーナリスト、会社サラリーマンなど。

1937年前衛的文化雑誌〈計画〉を創立したが、ヒットラーのオーストリア進駐後、出版警察により発行停止処分。〈総統〉嘲弄により、秘密国家警察の訊問。ヨゼフ・ヴァインヘーバーの仲裁、訴訟手続きの取り下げ。1945年以後は、出版者原稿審査係、劇評家。〈計画〉の継続、これは1948年まで出版された。20年間、バージルは有名な日刊紙〈新オーストリア〉で演劇評論家、文芸批評家として働いた。後に出版された著作は〈東洋の友〉〈天秤座〉〈詩節、黙示録〉〈あやふやな呼びかけ〉〈総統がそのことを知れば〉〈抒情的装い〉。〈ロヴォルツ・モノグラフィエン〉用に、バージルはゲオルク・トラークルのこの巻を執筆した。

1965年、バージルの著述活動に対し、ウィーン市栄誉賞が授与された。